

原爆乙女沙依子の軌跡

# 愛と 不安の夏

田中館哲彦

爆乙女沙依子の軌跡

愛と

田中館哲彦

不安の夏

## 田中館哲彦（たなかだて・てつひこ）

1947年、新潟県生まれ。NTT（前電電公社）勤務、雑誌記者等を経て、現在フリーライターとして活躍中。スポーツ、人物ルポを得意とする。主な著書に、「燃えろ！キッカーズ」（東宝映画「きみが輝くとき」原作）、「俺っちの星空野球」（フジTV「オレっちの星空野球」原作）、「キックに夢をのせて」、「はくらの初勝利」、「遠い青春の快走」などがある。そのほか、テレビ・ドキュメント等も、鋭意手がけている。

## 愛と不安の夏

定価 一三〇〇円

昭和六十二年八月六日 第一刷発行

著 者 田中館哲彦 〈検印省略〉

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二一九 郵便番号 一〇一  
振替 東京二八七五二七番  
電話（編集）〇三―二九四―一一二 （販売）〇三―二九四―一一三

印刷所 凸版印刷株式会社

© Tetsuhiko Tanakadate 1987 Printed in Japan  
ISBN 4-07-926335-X

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。  
お近くの書店か、本社へお申しください。

原爆乙女沙依子の軌跡

●愛と不安の夏

● 目 次

歴史の眼

5

——まえがきにかえて——

序章

29

第一章

前夜

33

第二章

出会い

59

第三章

見つめ合う

95

第四章

復顔オペレーション

123

第五章

自立への門

139

第六章

冬

175

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| 第七章  | 紀子の死  | 185 |
| 第八章  | 愛の疼き  | 215 |
| 第九章  | 葛藤    | 243 |
| 第十章  | 帰郷、別離 | 277 |
| 第十一章 | 出発と来訪 | 311 |
| 第十二章 | 愛よ永遠に | 345 |
| あとがき |       | 362 |



## 歴史の眼

—まえがきにかえて—

その日は人類の歴史に何を刻んだのか。一九四五年（昭和二十年）八月六日午前八時十五分、広島市上空で炸裂した一個の爆弾は全世界の人々を震撼しんかんさせた。晴れわたった空を突き抜けた一瞬の閃光。天空、地底を揺るがす轟音。表面温度一万度前後に達した大火球が立ち上り形づくった巨大な、不気味な、キノコ雲。秒速四百メートルの爆風。やがて空は光を閉ざし、闇となり、黒い、放射能の雨が降り出し、軍都・広島は一瞬にして壊滅した。この世の生き地獄と化した。

歴史は証あかしす。鉄骨はただれ、アメのように曲がった。コンクリートに人体が、動物が影絵のように焼きつけられた。市街地が火の海と化した。屍が至るところに散乱し、市内を流れる七つの川が死体で埋まった。地獄の呻うめきが地を這った。目が飛び出した者、内臓が破裂して腸が

飛び出した者、皮膚がめくれてダラリと垂れ下がった者、腕あるいは脚を失った者、裸同然の焼けただれた肉を剥き出しにした者——たちが、炎を逃れ、水を求め、肉親の姿を追ひ、行列をなしてうねる。次々と倒れ、息絶えていく。救いを求める負傷者に手をさしのべることもできない。赤子を抱え込んだまま死す母親の姿……。目をおおう惨状であった。過去のいかなる兵器・弾薬の常識をもはるかに凌ぐ爆弾であった。その爆弾は三日後の八月九日、長崎にも落とされた。再び、日本の西方の一都市は地獄と化した。

それは一体、いかなる爆弾であったのか。人類史上初めて登場した核兵器『原子爆弾』（通称・原爆）であった。

都市の壊滅、混乱、あまりに甚大すぎた被害。故に、その犠牲者数は今日に至っても正確につかみえないでいる。被害症状はしかも外傷にとどまらなかった。身体を内から蝕む、放射能による「原爆症」があった。脱毛し、多量の血を吐き、倒れてゆく……。被爆から四十年余、原爆症で息をひきとっていく人はなおあとを絶たない。その症状はさまざまでとらえどころがないが、死因は癌、白血病、肝機能障害などが上位を占めている。

被爆当時の犠牲者（死）数は日本原水爆被害者団体協議会の血のにじむような調査に基づく推定によると、一九四五年末時点で広島十四万人、プラスマイナス一人、長崎七万人、プラスマイナス一人とされている。国による本格的な調査はなく、被爆後四十年たった一九八五年十月の国勢調査で、初めて全国的な原爆死没者の実態調査が併せて行われることになった。な

お、その年の被爆者健康手帳の保持者数は三十六万七千人を超えていた。その間にも数万人の被爆者が苦しみながら逝っている。

原爆によってその惨状もつかみえない地獄がくり広げられ、はかり知れない苦悩と哀しみがまき散らされた。生命の花がその蕾を開きかけた多くの少女たちもその苦悩を背負った。思春期から年ごろへと成長してゆく中で、彼女たちが視<sup>み</sup>たものはたして何であつただろうか。

\*

被爆から十年——。一九五五年（昭和三十年）五月五日「子どもの日」、岩国の米空軍基地からアメリカの小型軍用機が一機、飛翔した。その薄暗い、殺風景でごつごつした機内には、傷ついた小鳥にも似て身をすくめ寄せ合う、年のころ十代半ばから二十代後半にさしかかった二十五人の乙女たちがいた。一様に沈んだ目をしていて。大半が頬や頬、唇、顎、首などに、ひきつった、あるいは黒ずんだ肉が盛り上がったケロイドの痕跡を色濃くとどめていた。手の数本の指が団子のようになつくつくついている。一見してはわからないが、腕や脚、背や腹など身体の各所に彼女たちは同様の傷を負っていた。頬や口、首や腕、脚などの機能を損われている者もあり、それらの自由な開閉、回転、伸縮、歩行などがままならなかった。

それらの傷は、原爆の爪痕だった。

その飛行は、彼女たちがアメリカで手術治療を受ける旅立ちであつた。名づけて「治療渡米」。彼女たちのことを日本では「原爆乙女」という呼び方をした。しかし、当の彼女たちは

その呼び名を嫌った。アメリカで呼称されることになった「ヒロシマ・ガールズ」を好む。

その治療渡米は、アメリカの民間人、文化人の有志によって興されたプロジェクトであった。その提唱者で中心となって活動したのは『サタデー・レビュー（土曜評論）』という文学雑誌を主宰するノーマン・カズンズという人物であった。文豪で知られるパウル・バックヤジヨン・ハーシー等の文化人が支援した。カズンズ氏の嘱託医であり、ニューヨーク五番街にある歴史も権威もある「マウント・サイナイ病院」の副院長だったW・ヒッチング博士が強力にあと押しした。同病院が無償で二十五人の被爆乙女たちの入院、手術の治療に当たることを受け入れた。

博愛主義をモットーとするキリスト教の一宗派、クエーカー教の人々、民間人の有志が協力を申し出た。資金づくり、宿泊施設……。二十五人のホームステイを提供した家は九十五家族に上った。テレビや新聞でそのプロジェクトを知り、一般の人々から五万六千ドル（当時で約二千万円）の募金も寄せられた。激励の手紙や訪問者も相次いだ。

二十五人の乙女たちはそれから一年余りの間に総計百三十三回の手術を受け、ケロイドの修復、機能障害の回復の闘病生活を過ごした。なお、二十五人のホームステイ、入院等の生活の差配には、戦前に米国で学び、終戦直後はABC（原爆傷害調査委員会）アメリカがつくった組織）で働いていた横山初子女史が当たった。夫と三人の子と離れての献身であった。また、手術には日本の医師も立ち会い、その執行にも手を尽くした。

「私たちは疑いもなく最初の原子爆弾が人類に対して使用されたことに、強い責任と憂いを感じ、私たちになしうることは何があるだろうかと考えた。(プロジェクトは)心なき同胞がヒロシマで犯した罪を償うひとつの道であった」(カズンズ氏)

一九八二年春先、ロサンゼルス の自宅にカズンズ氏を訪ねたとき、彼は心臓を患っていたが、世界平和の建設に深い熱情を寄せていた。

なお、付記しておけば、治療渡米のプロジェクトについては「原爆の実態調査のためだった」という声もある。

\*

ノーマン・カズンズ氏が被爆乙女の治療渡米計画を提唱したとき、アメリカの軍や政府関係者、あるいは一般市民の間では反対の声も聞かれた。その根幹には、日本の戦争責任、中国、東南アジアを主とする残虐な殺戮、略奪の侵略行為、真珠湾奇襲攻撃などに対する批判、非難の感情があった。

このため、原爆投下を正当化する主張はその当初から今日に至るまで根強い。

広島に原爆が落とされた翌八月七日、トルーマン米大統領が次の声明を発表した。

「日本軍は開戦にあたりパール・ハーバー(真珠湾)を空襲したが、いまや何十倍もの報復を受けたのである。これは原子爆弾である。宇宙に潜む根源の力を利用している。太陽の熱源が極東を戦禍の巷とした者を絶滅するために解放されたのである」

また、原爆投下から四十周年の一九八五年（昭和六十年）八月五日、レーガン米大統領はホワイトハウスで米国マスコミの記者会見に応じて、次のような要旨のコメントをしている。

「敵側（日本）は本土死守の徹底抗戦を必至とし、核兵器抜きで戦争を続けていればさらに百万人以上の犠牲が想定された」

アメリカの従来主張、戦争の早期終結という大義名分を強力に説いたのであった。

「原爆は日本軍の行為に対する鉄槌だった」とするアメリカ市民は今日も多い。

一方ではしかし、米国の有数な科学者たちが原爆の日本投下に反対し、核兵器戦争の到来に警告も発していた。一九四五年、原爆投下前の一カ月間に、原爆開発のマンハッタン計画に参加したアルバート・アインシュタインやレオ・シラードらノーベル賞受賞の物理学者を含む多くの科学者が、少なくとも三度からなる原爆使用反対の請願書を大統領宛てに出していた。その骨子は、日本への原爆使用に際しては少なくともまず日本に降伏の機会を与えること、仮に使用する場合でもその投下の道義的責任を真剣に考慮すべきであること、その使用は将来、想像できないほど大規模な破壊へ扉を開くことになる。開発国・アメリカは自制する義務がある——などというものだった。

だが、アメリカは人類史上初の核兵器・原爆の使用に踏み切り、第二次大戦後、さらに強力な水爆の開発実験にも乗り出した。その過程では、水爆実験に反対し、大量報復戦略を批判していた物理学者オッペンハイマー博士を、原子力委員会をはじめとするすべての公職から追放

する処置もとった。

今日、「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」「核兵器廃絶」を訴える平和運動は世界的な規模でうねっている。だが、日本への原爆投下を是とし、核兵器開発、増産の政策が他方で、ある。その「平行線」はいつまで続くのであろうか。地球壊滅の日がこなければよいが——。人類の英知が問われている。

\*

一九五五年（昭和三十年）四月、カズンズ氏、ヒッチング博士、マウント・サイナイ病院の形成外科医長A・パースキー博士、看護婦らが来日、広島市民病院で「治療渡米」の被爆乙女の選考に当たった。申し込み者は、某教会に集う若い女性を主とした四十三人。当初に予定していた二十人のワクを可能な限り広げて、二十五人に決定した。選考基準は「内臓疾患がない」「ことを前提にした」「治癒によって効果をみる可能性のあるひどいケロイド（火傷痕）をもった患者」というものであった。つまり、治る見通しの立たない原爆症、あるいは同じケロイドの疾患であっても手の施しようのない障害などを負っている被爆者は選考の対象とされなかった。大半の被爆者は放置されたままであった。

渡米する者と残る者——「非情」な歴史的、諸事情の制約を逃れることはできなかった。プロジェクトは、両者の間に溝や対立が生じぬように苦慮した。また、選考からはずれた十八人に對してはその後、日本においてできる限りの治療が受けられるように支援金が送られること

になった。

二十五人がニューヨーク入りしてから約一カ月半後、乙女たちの手術は開始された。

手術治療は、肉体的な機能の回復と、外形美容の修復という二つの柱から成っていた。だが、力点は機能の回復に置かれた。ケロイドの瘢痕を完璧に消し去ることは当時の医学としては未知の分野に入り、不可能に近かったからである。とはいえ、医師たちはその不可能にも全力を注いで挑戦した。また、新しい治療方法を試みる故に、日本人医師の同行をも招請したのであった。彼らが帰国後、その体験を生かすことを願って――。

手術はいずれも複雑なものだった。組織の復原手術は緻密さと忍耐を要求した。大量の皮膚移植は乙女たちにも忍耐を強いた。中には一九五二年秋、作家・真杉静枝の呼びかけを受けて、石川代志子（作家の石川達三夫人）、轟夕起子、長谷川一夫、乙羽信子、田中絹代、高峰秀子、柳家金語楼、古川ロッパら俳優の協力による治療募金を得て、東大病院・小石川分院ですでに数度の手術を受けている者もいた。回数を重ねる手術……。移植する皮膚が太腿、腹などから容赦なく切りとられざるをえない。見かねて、ホームステイのアメリカの夫人が申し出た。「私の皮膚を提供したい」。だが、他人の皮膚は一般的に一卵性双生児を除いては移植効果を望めないものであった。皮膚細胞が異なるからである。

一人の手術回数の最高は、東大病院時代を含めると二十七回にも上った。

乙女たちの機能障害はしかし、その度重なる手術を経て徐々に回復していった。日本の親に

電話を入れた一人がその前でむせんだ。「私は今、自分の手で受話器を握ってるのよ。それを見せてあげられないのが残念だわ……」

彼女たちは「醜貌」に対してもひそかな希求を、捨てきれずにもっていた。

「私たちもやはり女性です。今より美しくなればどんなに嬉しいか……」(S嬢)

「女であれば誰しも美しく魅力的でありたいと思わぬ人はいでしょう」(Y嬢)

しかし、同時に覚悟もしていた。

「私は自分の傷がともひどいことを知っています。それがかつての顔になるのは不可能なことも知っています。でもいいんです。そのかわり、何かが私の心を癒やしてくれ始めているのです……」(K嬢)

\*

手術が順調に進み、アメリカでの生活にもようやく慣れたところ、二十五人の乙女たちは、さまざまな方面の援助を得て自身の才能を切り拓き、将来の生活を築くべく、人生を豊かにすべく、各種の勉強に踏み出した。

絵画の学校に通い始めた乙女がいる。地方美術協会の奨励金を得た。一枚の絵がフレンド会という組織が催す秋の展覧会で売れた。彼女はそのお金をマウント・サイナイ病院に寄付した。

二人の乙女が陶芸技術を学びだした。ホームステイの「里親」が親しくしている装飾工芸家

のレッスンに送り出したのである。二人は将来、生活の糧とすることができるか否かの思いを抱きつつ、その試作品を郷里に送るようになった。

点字タイプを習い始めた乙女がいる。帰国後、目の不自由な人たちのために役立ちたいとの願いがあった。広島盲学校に点字タイプライターを贈るべく貯金もし始めた。

英文タイプに打ち込む乙女もいた。ホームステイの里親が彼女を高校の秘書科に編入させたところ、素晴らしい能力を見せた。彼女は行く先、輸入フィルム会社の秘書を望んだ。

このほかにも、多くの乙女たちが洋裁学校、美容学校、デザイン学校、ファッションスクールなどに通い始めたのであった。

彼女たちの裡から自信のようなものがじわじわと湧き上がってきた。深い絶望の日々から社会生活の自立を目ざして立ち上がりだしたのだった。

一人の乙女は振り返る。

「生きようと思ったとき、私たちだって生き甲斐を感じたいと思いましたし、そう思って当然なのだって気がつきました」

治療渡米を終えた後、彼女たちは実際、そこで学び培ったものを生かして仕事に就き、力強く新たな人生を踏み出し始めた。美容院や洋裁店を開いたり、電機会社やデパートに勤めたり、電話交換手になったり、各種の仕事を手にしたのである。それは自らの人生を切り拓く道であったと同時に、家庭の生計のためでもあった。その道はしかし、けっして平坦なもの